

ダニエル書の導入「神のご計画の分岐点」

1A イスラエルへの呪い

1B 神の民の背信

2B 教会から始まる神の裁き

3B 主への立ち直り

2A バビロンの勃興

1B 神への反抗

2B 偶像礼拝

3B 永遠の滅び

3A イエスご自身の預言

1B 大きな患難

2B 異邦人の時

3B 選びの民の再集

4A 黙示録の神の奥義

1B 女を襲う竜

2B 獣の国

本文

ダニエル書1章を開いてください。私たちの平日の学びは、ダニエル書に入ります。まず 1 章 1-2 節を読みます。「¹ ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに来て、これを包囲した。² 主は、ユダの王エホヤキムと、神の宮の器の一部を彼の手に渡された。彼は、それをシンアルの地にある自分の神の神殿に持ち帰り、その器を自分の神の宝物倉に納めた。」今晚は、ここの箇所というよりも、ダニエル書がいかにも、神のご計画の中で重要な部分を示す書物なのかを、その導入となる話をお分かちしていきたいと思います。

ダニエル書は、個人的にとっても思い出深い書物です。アメリカに移住して間もなく、カルバリーチャペル・コスタメサの教会の礼拝で、特別ゲストとして、ドン・スチュワート(Don Stewart)という方がダニエル書から説教をされました。後に、私が学ぶことになるスクール・オブ・ミニストリーで先生の一人になる方です。彼が、聖書の中で、神のご計画を知るのに重要なものとなる書物が四つあると紹介しました。その二つは比較的容易です。始まりと終わりを教える、創世記と黙示録があります。次に、マタイによる福音書があります。これは旧約時代から新約時代につなげる書物です。そして第四にダニエル書を取り上げました。これは意外ですね。けれども、ダニエルが生きていた、バビロンが世界帝国となった時代から終わりの日までの、世界がどうなるかの鳥瞰図となっているからだ、ということです。

それから、日本に戻って何度となく、ダニエル書をお話する機会にあずかりました。また、牧者チャックがダニエル書の聖書講解したものを日本語にも翻訳しました。そして、「聖書預言の旅」という本も書き、世の終わりについて、聖書預言から見ていくということは、自分のライフワークになっています。その時から、「今は終わりの日です。」「イエス様が戻って来られるのは近いです。」とお話していました。

けれども、ここ二・三年は、その切実度がかかなり高くなりました。私自身が、こんなことになるのか？という思いで圧倒されそうになります。自分自身で語りながら、まさかこんなことになるのか？という思いがいっぱいです。いろいろなことがあります。キリスト教の世界で、つまずきになりそうな事件が次々と起こっていること。世界が、これまでの移動を制限するコロナ流行が起こっていること。世界各地でむき出しのナショナリズム、民族主義的な動きが起こっていること。憎悪の連鎖。人権が過度に強調され、以前当たり前だったことを今、言えば、差別主義者とレッテルを貼られることなど。主を、なぜこんなことが起こるのですか？主よ、いつまでこのような状態が続くのですか？と問いたくなるのが、次々と起こります。

しかし、ダニエル書全体を改めて読み通しました。そこに見えてくるのは、神には永遠の御国があり、すべてを支配しておられて、王を立て、王を倒し、知恵と呼ばれる全てのものを掌握しておられるということです。神は主権者だということです。私たちはローマ人への手紙9章から11章までを、今、日曜の礼拝で見えています。そこにあるのも、テーマは神の主権です。私たちには到底、理解できないようなことが起こっていても、それでも神はご自分のみこころのままに、すべてのことをことごとく動かしておられるのです。一寸先は闇のようにさえ見える世において、それでも勇敢に主にお仕えするダニエルとその友人たちの生きざまを見て、私たちも勇気を得られたら、と願い、祈っています。

1A イスラエルへの呪い

今、読みました、1章1-2節にある言葉には、バビロンの王が、エルサレムに攻めて来て、神殿の中にある器の一部を取って行ったという出来事が記されています。器を取り去って、そして自分の神々、バビロンの神々の宮の宝物倉にそれらを入れます。そして続けて読むと、王族たちなどが捕え移され、その中にダニエルと三人の友人も含まれていた、ということです。

1B 神の民の背信

端的に、このバビロン捕囚という歴史的出来事を書き記しているのですが、聖書全体を読むと、これがいかに大きな意味を持っているのかを知ることができます。それは、神がアブラハム、イサク、ヤコブに、子孫にこの地を与えると約束されたところから、引き抜かれるという第一歩だったからです。アブラハム、イサク、ヤコブの子孫は、エジプトで増え、強くなり、神が預言者モーセを立て、そこから連れ出してくださいました。荒野の旅を経て、ヨルダン川を渡河して、ヨシュアたちは約束

の地に入ったのです。そして、四百年後にはダビデを王とするイスラエル国も建てられ、神が、ご自分の選びの民イスラエルによって、ご自分が生きておられること、支配しておられることを証しておられました。

けれども、モーセが約束の地のそばまでイスラエルの民を導いた時、モアブの草原まで導いたのですが、そこで、最後の説教を行いました。それが申命記です。そこでモーセは、28章で、主が命じられたことに聞き従えば、これこれの祝福があると宣言しました。けれどもすぐに、15節から、「しかし、もしあなたの神、主の御声に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次の全てののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる。」と宣言し、数々の呪いを宣言します。呪いといっても、これは、主が彼らを守り、恵み、祝福されることをおやめになり、彼らが望んでいるがままにさせることであります。彼らが主に背いているので、彼らが欲するままに明け渡し、その結果を自分自身で刈り取るようにされるということです。(参考:ローマ 1:24)。

飢饉が起こり、子も産まなくなり、病がはびこり、日照りが起こり、収穫があっても敵が奪っていきます。数々の呪いがある中で、最後にやってくるのは、「遠く地の果てからの一つの国」です。「申 28:49 【主】は遠く地の果てから一つの国を来させ、鷲が獲物に向かって舞い降りるように、あなたを襲わせる。その話すことばをあなたが聞いたこともない国である。」そして、この国に包囲され、ついに、「28:63b あなたがたは、あなたが入って行って所有しようとしている地から引き抜かれる。」と宣言します。主が、これから約束の地に導き入れようとする時に、すでにその地から引き抜かれるという預言をモーセは語ったのです。

聖書は、申命記をもってモーセ五書が終わりますが、その後の歴史、ヨシュア記以降は、まさにモーセがここで預言したことが果たしてその通りだったことを確かめる記録になっています。イスラエルの歴史は、これからどうなるか分からないものではなく、前もって神の語られていたことがその通りになることを知る記録になっているのです。数々の預言者が、主に立ち返って、この地から引き抜かれることのないように、この呪いが彼らの身に起こらないように警告しましたが、彼らは聞かず、モーセが前もって警告した通りになったのです。それが、ここの冒頭部分であります。

2B 教会から始まる神の裁き

神の民が、その約束されているものを失ってしまうことは、あり得ることです。イスラエルの民が見捨てられなかったように、キリストにあって教会も見捨てられることはありません。けれども、約束されている祝福を、その不従順によって失ってしまうことは十分にあります。私たちは、ダニエル書によって今は終わりの日であることを見ます。その終わりの日とは、教会に対しても神の裁きがあるという日であります。「I ペテ 4:17-18 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。18 「正しい者がかろうじて救われるのなら、不敬虔な者や罪人はどうなるのか。」冒頭で、言及

しました、教会におけるつまづきとは、人々が罪を犯していくことです。しかも、罪を犯すだけでなく、それを犯しても大丈夫だと教える偽教師たちも出て来ることを、ペテロは第二の手紙で教えていました。その状態は、ちょうど「犬は自分の吐いた物に戻る(3:22)」とあるように、「初めの状態よりもっと悪くなります。(3:20)」とあります。私たち教会が、今の時代、本当に大切なものだけを残すために、神が敢えて不純物を取り除くことを行われているのかもしれませんが。

3B 主への立ち直り

神に選ばれ、神のものとされた民が、なぜそのようなことになってしまったのか？それは、彼らが自分たちの神ではなく、異教の神々に仕え、拝んでいったことにあります。思えば、彼らはエジプトを出た時から金の子牛を拝み、約束の地に入ってから、ヨシュアが死んだ後にはすぐに、カナン

の神々を拝みました。そして、イスラエル王国がたてられてから、南北に分裂して、北は金の子牛をベテルとダンに安置して、アッシリアに攻められ捕え移されますが、南は、ヒゼキヤの息子マナセの時代に、カナン人の拝んでいる神々に仕えるようになり、生まれてきた子たちも火の中を通らせるようにしたのです。それによって神は、必ず外国の国に彼らを引き渡すがままにさせるとお決めになったのです。

実に千年ぐらい、イスラエルの歴史は偶像礼拝から切り離せない生活を送ってきました。しかし、七十年間のバビロンでの捕囚生活は、その生活を断ち切る出来事となったのです。神による厳しい裁きでありましたが、それは同時に、千年ぐらいかけても断ち切ることのできないものを断ち切る、大きな、新たな一歩です。

私たちも、キリスト者になったけれども、イスラエル人と同じように、元々、異教の社会、多神教の社会に生きていました。そこでは、「相手を敬うために、相手の拝んでいるものを拝む」という考えに基づいています。エジプトにいれば、エジプトの神々。カナンの地にいれば、カナン人の神々に仕える、というように。地域の神々に仕えるのです。私たちがイエスを自分の主として生きているはずが、周りの人々に合わせて生きて、イエス様が実質、主になっていない、第一になっていないということがあります。教会は教会、世の中は世の中、という棲み分けを行っています。けれども、神はイスラエルの民になされたように、時には、不本意なこと、非常に生きづらくさせるようなことを私たちに与えられます。それによって、初めてこの方だけが主なのだ、この方だけが神なのだということに気づくのかもしれません。ダニエル書は、そうした捕囚の期間に、異教の社会、異邦人の国に生きていながら、それでもそこに神のみこころがあるとして、忠実に仕えて行った人々の証しであります。

2A バビロンの勃興

そして、エルサレムが滅ぼされたのが、バビロンによるということも、神のご計画の中では大きな出来事です。歴史の中では、バビロニア帝国は二度現れています。古代バビロニア帝国というの

が、紀元前 2000 年から 1600 年にかけて隆盛しました。ハンムラビ法典で有名な帝国です。そして、新バビロニア帝国があり、それが今、見ているネブカドネツアル王が世界征服をした帝国です。

1B 神への反抗

けれども、聖書は、バビロンというものをもっと大きな存在として描いています。エデンの園の時から、その陰が見えます。エデンの園からユーフラテス川とティグリス川が流れていますが、バビロンは、その間にあります。いわゆるメソポタミアですね。そこにアダムとエバがいた時に、蛇がやって来てエバを惑わし、アダムが罪を犯しました。

そしてノアの時代の洪水があつて、主が、産めよ、増えよ、地に満ちよとの命令を出されました。ところが、人々が一つ所に集まって町を造りました。そして天に届く塔を、我々の名が残るようにということで作ったのが、バベルの塔で、これがバビロンの起源です。このバベルの町を造ったのが、創世記 10 章を見ると、ニムロデという人です。彼が、「主の前に力ある狩人(10:9)」とありますが、主に対する力ある狩人と訳したほうがいいかもしれません。つまり、主に反抗して、人々が地に満ちるように主が命じられたのに対して、一つ所に集まって自分たちの力を誇示しようとしたのです。バビロンとは、つまり、神の命令と秩序に意図的に反抗する都となりました。「われわれが地の全面に散らされるといけないから。(11:4)」として、主の命じられたようにならないように、意図的に建てた町です。

そして黙示録に行くと、9 章において、ユーフラテスのほとりにつながれている、墮落した天使四人が出てきます。解き放たれると、二億の軍隊が押し寄せてきます。16 章では、第六の御使いが鉢の中身を、ユーフラテス川にぶちまけます。そうすると、竜の口、獣の口、偽預言者の口から、蛙のような三つの汚れた霊が出て来て、それによって東から来る王たちが、ハルマゲドンに集まるという預言があります。そこに悪霊どもが住んでいることがよくわかります。

それに対抗するべく、神がご自分の選ばれた都を建てられたのが、エルサレムです。メルキデゼクが、アブラハムに現れ、彼を祝福しましたが、サレムの王でした。エルサレムのことです。そして、神はご自分の名を置く場所を定めることを、モーセに対してお語りになり、ダビデを通してそれがエルサレムであることを示されました。そして、エルサレムで、私たちの主イエスが死なれ、よみがえられ、また聖霊が降り、そしてオリーブ山に再び戻って来られます。エルサレムの神殿から主は、世界を統治されます。そして、天と地が過ぎ去り、新しい天と新しい地が造られた時は、天から降りてくるのは、新しいエルサレムなのです。

2B 偶像礼拝

バベルの塔を建てる時に、「頂が天に届く塔を立てて、名をあげよう。(10:4)」とっていました。これは、天にある太陽や月、星などの天体を拝む、偶像礼拝の始まりとも言えます。事実、バビロ

ンの宗教が原型となって、世界に偶像が広がったと言ってもよいかもしれません。愛と美のイシュタルという女神は、エレミヤ書で「天の女王」(7:17, 44:15-18)とも呼ばれ、ユダの民はエルサレムでも天の女王を拝んでいました。エジプトではイシスとして拝まれました。カナンでは、アシュタロテとして拝まれます。ギリシアではアフロディテが、ギリシア神話に出てきます。そして、ローマでは、ウェヌスあるいはヴィーナスです。

皮肉なことに、イスラエルは、バビロン発の天の女王を拝み、そのバビロンによって滅ぼされ、捕囚の民となったのです。偶像を拝むことによって、その偶像を拝む相手を敬っていると思いきや、いいえ、結局、相手によって虐げられるのです。他の人たちが拝んでいるのだから、自分もそうしなければいけないという考えは、相手を敬っているのではなく、むしろ相手に滅ぼされてしまいます。その真逆をしたのが、ダニエルの友人三人です。ネブカドネツアルの金の像を拝まずに、かえって神に救われました。そして、ネブカドネツアルも、その一途な献身をほめたたえています。

3B 永遠の滅び

バビロンは、こうした自らを、世界を牛耳る女王のような存在として奢っていましたが、それを一気に、一夜にして滅ぼされたという歴史も持っています。私たちはダニエル書 5 章でそれを学びます。この出来事について、イザヤとエレミヤが猛烈に預言しており、またハバクク預言しました。そこに表れるバビロンは、歴史上の新バビロニア帝国だけではなく、それを越えて、バベル以降、神に反抗している世の制度を指して預言していることが分かります。例えば、イザヤ書 13 書、バビロンの王について預言している時、悪魔自身ではないかと思われる、「明けの明星」が墮落する場面が出て来るのです。そして、そこには徹底的に永遠の滅びが予告されています。

そして黙示録に、イエス様が地上に再臨される直前の預言が、大バビロンなのです。17-18 章にあります。これが、歴史上の新バビロニア帝国ではないことは明らかですね。当の昔に滅んでいまずから。それが地理的に同じ位置にバビロンが再興するのか、それとももっと大きな存在を表しているのか、意見は分かれますが、大淫婦が地上の王たちに淫乱を行っている姿は、まさに偶像礼拝と、キリストと結ばれている花嫁なる教会とは真逆の道であることが分かります。そして、この女に対して、一日にして滅ぼす預言もそこにあり、19 章で天における大歓声があがります。この女が滅ぼされたからです。

3A イエスご自身の預言

ですから、ダニエル書は第一に、イスラエルに対する神の呪いが実現してしまった出来事を示し、第二に、主に反抗する町バビロンによって実現したことを示しています。そして、ダニエル書は、イエスご自身がその預言をもって、世の終わりについて弟子たちにお語りになった書物です。「マタ 24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら—読者はよく理解せよ—16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」マ

タイは、「読者はよく理解せよ」とまだ注釈を入れて、しっかりダニエル書を理解せよという、使徒からの命令さえ入っている書物なのです。

1B 大きな患難

ここのイエス様の言葉を読み進めると、「24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。」とあります。神が世の終わりに定めておられる、大きな苦難、大患難とも呼ばれますが、それがダニエル書に基づいて預言されているのです。続けて、イエス様は、「24:22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われられないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」と言われていきます。これは、イスラエルの選ばれた民、残りの民に対する患難があるからです。

2B 異邦人の時

そしてイエス様は、ご自分と弟子たちが見ている神殿が滅ぼされることをかんがみて、「異邦人の時」と呼ばれました。「ルカ 21:24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」エルサレムが異邦人に踏み荒らされるのが、異邦人の時です。ですから、ある意味、バビロン捕囚の時から異邦人の時が始まっていると言ってもいいでしょう。主が、ご自分の名を置くと明言されたエルサレムが異邦人の支配に入っている時のことを、ここまで明確に語っているのは、ダニエル書なくて、他にありません。だから、とても重要なのです。

ダニエル書で特徴的なのは、2章から7章までがヘブル語ではなくアラム語で語られていることです。アラム語は当時の貿易の時の言語、今の英語のような存在です。ユダヤ人に語られているヘブル語ではなく、世界の全ての人々に語られるためにアラム語に変わったのだと思います。ユダヤ人に働かれて、神がご自分の証しをされているところから、異邦人に直接、働き、世界への証しを立てられていて、それから再びヘブル人に神が介入され、救いを完成されます。救いについて、私たちはローマ9章から11章を今、学んでいます。そこにも、ユダヤ人への救いから、異邦人にも救いが届けられ、それからユダヤ人の救いを完成されるという流れがあります。今、私たちは、異邦人の時から終わりの日に向かう時、また異邦人への救いを完成され、イスラエルへの救いをもって完成される手前にいると言ってもいいです。

3B 選びの民の再集

マタイ 24章に話を戻すと、再臨のイエス様によって救われます。そして天の四方に散らばっている選びの民も集められます。この様子、つまり残りの民が患難の中で練り清められることも、ダニエル書に預言されています。そして12章で、御使いミカエルが、最後の戦いにて応戦し、残りの民が救われ、また先に死んだ者たちもよみがえって、永遠のいのちを受ける者もいれば、永遠の滅びに定められてるものもいる、という内容になっています。

4A 黙示録の神の奥義

こうしてダニエル書は、第一に、イスラエルへの呪いが実現したこと。第二に、バビロンという世の象徴的存在。第三に、イエス様の預言された大きな患難について。そして最後、第四に、「黙示録における神の奥義」があります。子羊が七つの封印を解かれますが、七つの封印が解かれると、七つのラツパを御使いたちが吹き鳴らします。第六のラツパまで吹き鳴らされた後で、まだ解かれた後で、大きな力強い御使いが宣言します。「10:7 第七の御使いが吹こうとしているラツパの音が響くその日に、神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する。」神の奥義が実現すると宣言しています。

1B 女を襲う竜

その後の話は、ダニエル書の後半に出て来る、「荒らす憎むべき者」が獣として登場する話になっています。初めに、赤い竜が出てきます。そこで、女がいますが、彼女はイスラエルを表しています。そして、竜が女を殺そうとします。ダニエル書には、ギリシアの王アンティオコス・エピファネスが、ユダヤ人を虐殺する預言があります。

2B 獣の国

そして獣の国ですが、その支配が 1260 日 (11:3)、三年半であることが書かれています。ダニエル書には、ひと時と二時と半時、という言葉で何度となく出てきます。また、第七十週の半週のところにも出てきます。ダニエル書にある預言を基にして、黙示録の後半部分はその出来事が展開していているのです。ダニエルに啓示されたことが、ヨハネにイエス・キリストにあって明らかにされていくという預言のつながりがあるのです。

ですから、ダニエル書は神のご計画の中で非常に大切な書物となっています。神の御国について、イエス様がその奥義を語られた時に、弟子たちにこう言われました。「マタ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。17 まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」私たちは、イエス様にあって知らせていただいた知識をもって、今の世を生きないといけません。パウロの次の言葉で締めくくりたいと思います。「ロマ 13:11-12 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いをもっと私たちに近づいているのですから。12 夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。」